

## プロローグ（序章）

「室長、そろそろ立ち直ってもらえませんか。今日は仕事を立て込んでいます。いくら専務たちにポロカスに言われたからってそんなに落ち込まないでください」

少々あきれながらも上司を慰めて叱咤しているのは吉田薫子。実質的に企画室の仕事を仕切っている優秀な社員だ。25歳、独身。

慰められているのは企画室長の片桐洋介。30歳、既婚、2児の父である。この会社、片桐工業（株）のれっきとした「将来の経営者」と目されている。公式愛称は「ヨースケさん」だが、陰では「ジュニア」と呼ばれていることを本人も知っている。

「吉田君、分かっているよ。でもね、僕が落ち込んでいるのは別段、柴田専務らにけなされたからじゃないよ。僕の提案が却下されたからだよ」

「室長、無理に言い訳しなくても結構です。経営会議が終わってこの部屋に戻ってきてから何度ため息をついていることか。ご自分では気がついていないようですけど。ほとんど先生に叱られたばかりの生徒みたいですよ」

「だってね、君らにも資料収集やデータ分析を色々と手伝ってもらったから分かると思うけど、今回の企画室はか

なり力作だったんだよ。資料をまとめるだけでも2ヶ月以上もかけたんだ。それをあっさりと『ありふれていて独自性がない、工夫がない』と拒絶されたんだから、落ち込むのは当然じゃないか」

「でも同席させていただいた私から見ても、専務のご指摘は当然だと思いました」

「え？ そうなの？」

「だって元々の発想が『世の中で注目されているからわが社もIoT（注<sup>1</sup>）に注力すべき』でしょう。それに内容的にもどこかで聞いたことがある事業モデルばかりで、多くの大手メーカーやITベンダーがすでに取り組んでいそうです。それでは「流行の後追いで、独自性がない」と言われても仕方ないと思います。なぜわが社がIoTに取り組む必要があるのか、つまり『なぜIoTなのか』をもっと突き詰めるべきでした」

「本当にそう思うんだったらもっと早く言ってよ」

「言いましたよ。でも室長、ちゃんと聞かなかつたじゃないですか。『大丈夫、この領域は今後すごく広がるから。もし先行できれば、今みたいにティア1（ワン）の値下げ要請の言いなりになってアップアップしなくとも利益を生めるようになるんだ！』と吠えるばかりで。室長が企画案づくりに没頭しているのに小高君と私が無視する訳にはいきませんもの、一生懸命手伝わせていただきました。確かに『何かしなきゃいけない』というのは分かりますが、だからといっていきなりIoTというのは論理が飛躍していると思います。専務はそれを指摘されたんじゃないですか？」

---

1 IoT=Internet of Thingsとは「物のインターネット」。機器などの「対象物」にセンサーやカメラなどを付けて位置や状態などを把握できるようにすること。

若手の小高までもが額うなずいているのを横目で見ながら、洋介は内心、「またやってしまった」と反省した。

昨年の企画室長就任以来、なんとか自社の現状を打破する企画を打ち出したいと考えた洋介は、幾つかの企画を経営会議に提案したのだが、いずれも役員たちの賛同を得られずボツになっている。とうとう数か月前には実父で社長の片桐洋一郎から「焦るな」と諭されたばかりなのだ。だからこそ今回は時間をかけて資料を充実させたつもりだったのだが……。

片桐工業（株）は中堅金属系部品メーカー、いわゆるティア2（ツー）だ。その現状は危機的という訳ではない。独立系で非上場ながらも連結での年間売上は100億円超にのぼる中堅企業だ。主な取引顧客は自動車部品および電子機器系部品大手（いずれもティア1）で、近年は顧客の意向で中国とタイに進出済のため、日本の本社工場の売上は漸減気味だ。残念ながらも抜けた技術力がある訳ではないため、全社売上は増加を続けているが、利益は黒字基調ながらも為替次第で増減益を繰り返す程度の安定度だ。

言い方は悪いが社風は「ぬるま湯体質」で、社員には危機感も薄い。大学卒業後の約5年間、取引先でもある総合商社にて「武者修行」として勤務した洋介にはそんな現状を変えたいという思いがずっとある。性格的にはネアカで粘着質ではないが、苦勞知らずのボンボンと見られていることに実は内心反発している。

今日も以前から温めてきた「秘策」と自負する企画案を、満を持して経営会議に提案したのだが、ものの見事に玉砕したのだ。勢いよく説明を始めた洋介に対し、腕組みをしながら暫く黙っていた柴田専務だったが、洋介がデータの分析内容の説明を始めようとした途端に制し、「そもそも……」と諭すようにとくとくと駄目出しをしたのだ。

会議の様子を思い出して洋介がぼやく。

「なにせ専務は元々は生産畑のたたき上げだからIoTなんかピンとこないんだよ。創業メンバーでもあるしわが社の『生けるレジエント』だから、あの人が反対すれば誰も強く言えないしなあ。社長ですら遠慮気味なもの」

「あら、そうかしら。柴田専務は技術開発・生産部門を統括してらっしゃるので、75歳というご年齢にもかかわらず色々と勉強されています。IT（情報技術）にだってすぐく明るいと思いますよ。こないだはAIをどう設計に活かすかの議論を部門内ですので、関連情報を集めて欲しいと言われて、私届けましたもの」

「あらら、そうなんだ。それにしても吉田君は専務にも気に入られているよね。まあズケズケと物をいう君の性格がかえってウケているようだな。僕は正直、専務は苦手だよ。入社当初に随分叱られたからねえ」

「それは室長が苦手意識を持って接しているからですよ。確かに柴田専務は昔気質で、いい加減な人間には猛烈に叱りますが、論理的であれば話はきちんと聴いてくれるって、部下の人たちのもっぱらの評判です。今日も頭ごなしに否定はしなかったじゃないですか」

「ええ？ それって僕がいい加減な人間だってこと？」

「違います。それだったらもつと怒鳴られているんじゃないですか。むしろ、何度企画案を蹴られても懲りずに提案してくる室長の根性に、柴田専務も感心しているんじゃないですか。だから今日も『ありふれていて独自性が無い、工夫がない』と、次に成功するためのヒントをくれたんだと思います」

「うーん。褒められているのか、けなされているのか、なんか微妙な感じだなあ」

少々納得できない感を残しながらも、次の企画について真剣に考えようとしている洋介だった。しかしながら一体何をどうすれば会社の役に立てるのか、今までの企画の進め方のどこがどう悪いのか、まだよく分からないまま悩んでいた。